

不定語の構文特性の変化と語彙化  
Yayoi Nakamura-Delloye

► **To cite this version:**

Yayoi Nakamura-Delloye. 不定語の構文特性の変化と語彙化. 日本語学会 2014 年度春季大会 [The 2014 Spring Meeting of the Society for Japanese Linguistics], May 2014, Tokyo, Japan. <hal-01419956>

**HAL Id: hal-01419956**

**<https://hal-inalco.archives-ouvertes.fr/hal-01419956>**

Submitted on 14 Oct 2019

HAL is a multi-disciplinary open access archive for the deposit and dissemination of scientific research documents, whether they are published or not. The documents may come from teaching and research institutions in France or abroad, or from public or private research centers.

L'archive ouverte pluridisciplinaire HAL, est destinée au dépôt et à la diffusion de documents scientifiques de niveau recherche, publiés ou non, émanant des établissements d'enseignement et de recherche français ou étrangers, des laboratoires publics ou privés.

## 不定語の構文特性の変化と語彙化

デロワ中村弥生（フランス国立東洋言語文化研究所）

Yayoi NAKAMURA-DELLOYE (Institut national des langues et civilisations orientales)

本発表は、「何，誰，どこ」等の基底語（尾上の不定語）に，助詞「か，も」等の付加マーカーが不定の値を与え構成する単位を不定語とし，これらの不定語が現在語彙化の過程にあると考え，特に「何，誰，どこ」の不定用法に関し，それぞれの語彙化レベルを観察すべく行った記述的研究について報告する。

### 1 疑問語／不定語体系

「疑問語」「不定語」は形態，構文機能による分類のいわゆる品詞範疇ではなく，意味的な指標で様々な品詞カテゴリーの語が集まった集合である。益岡・田窪（1992）では，疑問表現で用いられるものを疑問語と定義しており，次の語が例示されている。

- 名詞：誰，何，いつ，いくつ，いくら
- 副詞：なぜ
- 指示詞ど系列
  - 名詞型：どれ，どこ，どちら
  - 連体詞型：どんな，どの
  - 副詞型：どう，どんなに

多くの言語において疑問語と不定語は同一の語から形成されるが，日本語もその例外ではない。不定語は，付加される助詞により存在量化（例文 1），全称量化（例文 2），否定（例文 3）用法に区別される。

- (1) 部屋に 誰か いる。
- (2) どこでも 寝られる。
- (3) 何も 食べたくない。

例文 1 では，「誰」が「か」をともない存在量化された不定語を，例文 2 では，「どこ」が「でも」をともない全称量化された不定語を，例文 3 では「何」が「も」をともない否定対極表現をそれぞれ形成している。このような分析において，日本語の疑問語・不定語は，「なに，どこ」等の基底となる語に，助詞や「イントネーション」といった他の要素が付加され形成されることができると考えることができる。ここでは，仮にこれらの基底となる語を基底語（尾上（1983）の「不定語」）と呼ぶ。多くの研究において，これらの基底語は本来意味的に自立した要素ではなく，その用法を決定する他の要素の介在のもと初めて所定の意味機能を担いえるとされる。三原（1994）も，疑問語，不定語を基底語を中心とした二部構造と分析している。

- (4) [誰が何を買いました] か  
 (5) [誰が何を言って] も、僕は気にしない

例文 4 では、疑問の終助詞「か」が「誰」「何」という語に疑問の値を与えており、例文 5 では、助詞「も」がこれらの語に全称量化された不定の値を与えていると分析することができる。

## 2 不定語の構文特性

では、このようにして基底語を中心として形成された不定語はどのように文の構成要素として組み込まれていくのであろうか。先にも述べたように、一口に不定語と言っても、不定語というカテゴリーは構文機能に基づいて分類された品詞ではなく、その構文特性をひとくくりに扱うことは不可能である。ここではまず、特に一般に名詞または名詞同等と考えられる不定語に話をしぼりたいと考える。これらの不定語は格助詞により、または格助詞無しで、文の構成要素を形成する（例文 6）。

- (6) 誰か 来た。／誰かが 来た。

一見単純にも見える不定語であるが、実際は助詞をともない文の構成要素となる不定語句の内部構造は大変複雑である（例文 7～10）。これら例文では、太字が基底語、太斜体字が付加要素、下線が格助詞である。不定語は格助詞をとなくても、または格助詞無しでも、文の構成要素を形成できるという特性に加え、もともと基底語と付加要素という 2 つの要素から構成されているため、これら 2 つの要素の間に、助詞が挿入されることも可能であることから、実際の文中にはさまざまな形で現れるのである。

- (7) 誰かに 相談する。／誰かからか 聞いた。  
 (8) 誰もが 知っている。／誰でも 知っている。  
 (9) 誰にでも 分かる。  
 (10) 誰にも 言えない。

また、不定語の注目すべき構文特性として、格助詞無しの不定語と同時にそれと同格と考えられる名詞句が現れる場合がある（例文 11）。これは、日本語にはフランス語の不定冠詞のような補語の不定特性を示すことに特化した手段がないことから発達した構造だと考えられる。

- (11) 誰か 学生が 来た。

このような不定語の格助詞有りでも無しでも文の構成要素になれる特性、また同格構造を形成する特性は、しばしば遊離構文とも呼ばれる同格構造を形成する数量詞の特性との類似性が指摘される。(Kamio1973, 奥津 1985, 江口 1990)

- (12) 二人 来た。／二人が 来た。 (cf. 6)  
 (13) 二人 学生が 来た。 (cf. 11)

ここで、このような同格構造内で不定語や数量詞と同格の位置に現れる名詞句を主名詞句と呼ぶことにする。名詞性不定語の連体修飾には、格助詞を後接する不定語自身が連体節を受ける場合（例文 14）と同格の主名詞が連体節を受ける場合（例文 15）と二つの可能性がある。

- (14) 耐えられない**何か**が あったにちがいない。  
 (15) **何か** 耐えられないことが あったにちがいない。

しかしながら、不定語自身が連体節を受ける構造は、文法的であったとしてもかなり不自然である場合が多いことが前述の奥津の著書などでも指摘されている。

- (16) ?冷たい**何か**が飲みたい。  
 (17) **何か**冷たいものが飲みたい。  
 (18) \*あなたが行くどこでもついて行きます。  
 (19) どこでもあなたが行くところへついて行きます。  
 (20) あなたが行くところならどこでもついて行きます。

例文 16, 18 が示すように、不定語が形容詞や節などの修飾要素を受けることは難しく、総称的な上位語が主名詞となって連体節を受ける「底」となり、不定語が遊離要素となる構造が用いられる (例文 17, 19)。さらに全称量化用法では不定語を主節の副詞位置に残したまま主名詞句を主題化すると、より自然な日本語になる (例文 20)。

### 3 不定語「何か」の使用分析

では、文学作品における実際の使用分布はどのようになっているのか、コーパスを用いて、まず不定語存在量化用法「何か」の出現文脈を分析した。コーパスは『DVD版新潮文庫100冊』のうち、1950年以降に出版された小説11作品を集めたものを使用した。このコーパスは約6万7千文を含み、その60%が70-80年代の作品、30%が50-60年代の作品、残りの10%が50年以前の作品である。そこから得られた不定用法と考えられる「何か」を含む用例560を分析の対象とした。

「何か」が現れた構文構造は、3つに分けられる。まず第一に不定語が格助詞を伴って文の構成要素となっているもの (例文 21)、次に不定語が格助詞無しで文の構成要素となっているもので、同格の主名詞句をともなっている遊離構文型 (例文 22, 23) とそうでない単独使用型とがある (例文 24, 25)。

- (21) 必ず彼女は **何か**を 思い出すにちがいない [筒井]  
 (22) **何か** 本を 読んでいた [三島]  
 (23) **何か** 仕掛けが してあるらしい [谷崎]  
 (24) 有為子は **何か** 語りかけた [三島]  
 (25) この人は **何か** できる人だと思うんです [沢木]

各構造の全体に占める割合は、それぞれ 55%, 30%, 15%であった。このうち例文 21 のような不定語が格助詞をともなった構造は、藤原, 筒井, 村上の作品に多く見られ、藤原, 沢木, 村上の作品では特にこの構造が好んで使われていることが分かる。次に、連体修飾構造を観察すると、格助詞をともなった不定語が連体要素を受ける例 (例文 26, 27) と不定語と同格の主名詞が連体要素を受ける例 (例文 28, 29, 30) とが採集された。不定語が連体要素を受ける構造は全体の 26%, 不定語と同格の主名詞が連体要素を受ける構造が 74%であった。

- (26) 自分を支えてくれる強力な**何か**を 無意識に探し求めていた。[藤原]

- (27) 心の存在に結びついている何かが残っている。 [村上]  
 (28) 何か 怪しい所があるの? [谷崎]  
 (29) 何か 美しい小さな色彩の渦のようなものがあつて [三島]  
 (30) 何か 変わった設備があるわけでもない。 [村上]

不定語が直接連体要素を受ける構造が採集されたということは、われわれや奥津が抱く「不自然」という直感に相反するものであるが、詳しく観察すると実はこの構造はごく限られた作者にしか使用されておらず、しかもそのほとんどが、藤原、沢木、村上の3作品に限られている。このことから、これら不定語を直接修飾する連体構造は比較的新しい構造であり、現在使用が拡大しつつある構造なのではないかと考える。

#### 4 不定語の語彙化に関する仮説と検証

このような連体構造の発達に加え、先に述べた不定語内部構造の複雑さを考えると、これらの現象は不定語の語彙化と深く関わっているのではないかと考えられる。つまり「何か」「誰か」「どこか」というもともとは二つの要素からなる語が一つの単位としての結びつきを強め、語彙化し名詞性を獲得する過程で起きている現象なのではないかと考えたわけである。「何か」が格助詞をともなって文の構成要素となる構造は、名詞的係り素性の獲得を示す現象であり、「何か」を直接修飾する連体構造の発達、名詞としての受け素性の獲得の現象としてとらえることができるのではないかと考える。そこで、これらの不定語について、今回は語彙化という面からコーパスを用いた用例分析を行い、「何」系、「誰」系、「どこ」系の3つの不定語に関し使用の現状の把握を試みることにした。

##### 4.1 「何」系不定語

	存在量化		全称量化		否定	
	出現数	連体構造	出現数	連体構造	出現数	連体構造
+MK +格助	284	39				
+格助			24		124	
-格助	231 (154)	(105)	27 (8)	(5)	325 (74)	(60)

図1: 「何」系不定語用法別出現数

図1は、「何」系の不定語に関しそれぞれの用法別出現数をまとめた表である。存在量化、全称量化、否定の用法ごとに用例数を示している。「連体」の列は、出現数中で連体構造を含む用例数を示している。一番上の行は付加マーカがついた形で格助詞がついた用例数であり、2行目は付加マーカがついていない裸の形で格助詞をとって文の構成要素になった用例数である。3行目は格助詞のつかない副詞用法で、カッコの中には主名詞句を伴った遊離構文型の用例数を示した。

第3節で見た「何か」は「何」の存在量化不定用法である。マーカが付加された形で格助詞を取っている用例が多いことから、「何か」の語彙化が進み名詞的係り素性を獲得していることが窺える。また、連体要素を受けた用例も確認され、名詞的受け素

性も徐々に獲得し始めていると考えられる。

全称量化用法に関しては、付加マーカ―と一体化した上で格助詞を後接する例は見つけれず、「何でも」という形で名詞性を獲得していることを示す用例は見つからなかった。例文 31, 32 は、付加マーカ―を取らずに格助詞が直接後接した例だが、この形で連体要素をとった例は見られなかった。連体構造は、すべて遊離構文型であった(例文 33, 34)。ただ、「何もかも」という形での名詞化が確認された(例文 35, 36)。

- (31) 何にでも shift が使われる。 [藤原]
- (32) 何をやっても一流なの。 [村上]
- (33) 読むものなら 何でもいいの。 [谷崎]
- (34) 何でも云う ことを聴くか。 [谷崎]
- (35) 彼の 何もかもが好ましく見えた。 [筒井]
- (36) 私をとりまく 何もかもが重く感じられた。 [村上]

否定用法についても、全称量化用法同様、連体構造は例文 37, 38 のようにすべて遊離構文型であった。また、付加マーカ―と一体化した上で格助詞を後接する例は見つけれなかったが、ここでも付加マーカ―を取らずに格助詞が直接後接した例が観察され、特に助詞「の」をともない名詞を修飾する例が多く見られた(例文 39, 40)。

- (37) そこには流れるもの、うつろう ものが 何もなかった。 [三島]
- (38) (前略) ような特殊な 技術は 何ももたない。 [開高]
- (39) 妻を捜すこと以外、何をする気にもなれず [筒井]
- (40) 何の楽しみもありません。 [谷崎]

この例文40は、例文41のようにパラフレーズが可能であり、ここでも数量詞構造(例文42)との類似性が窺える。

- (41) 何の楽しみもありません。／楽しみが 何もありません。 [谷崎]
- (42) 三人の学生が来た。／学生が 三人来た。

#### 4.2 「誰」系不定語

	存在量化		全称量化		否定	
	出現数	連体構造	出現数	連体構造	出現数	連体構造
+MK +格助	138	9	31	3		
+格助			65	8	75	2
-格助	28 (18)	(10)	42 (10)	(4)	139 (17)	3 (12)

図2: 「誰」系不定語用法別出現数

図2は「誰」系の不定語それぞれの用法別出現数をまとめた表である。存在量化用法に関しては、「何か」と同様、「誰か」の形で語彙化が進み、名詞性の獲得も進んでいるようである。格助詞を伴わない副詞用法の割合が低く、名詞的係り素性が特に高くなっていると考えられる。

- (43) 誰か 後ろから肩をたたく 者がいる。 [藤原]
- (44) ここを引き払った 誰かがそのときに井戸も埋めてしまったのだろう。 [村上]

全称量化用法に関しては、まず付加マーカ―が付いた「誰も」の形で助詞が後接する用例が見られた。しかし、格助詞が直接後接する形も未だ多く、語彙化は「誰か」「何か」ほど進んではないものと考えられる。付加マーカ―がついた形(例文 45, 46)でも、付加マーカ―のつかない裸の形(例文 47)でも連体要素を受けたものが見られ、遊離構文型(例文 48, 49)と並行して使用されている。

- (45) 世界中の**誰も**が夢見たものばかりだ。 [藤原]
- (46) 老若男女の**誰でも**がいつも忙しそうに活動している。 [藤原]
- (47) そこに集まっている**誰よりも**強く味わっていた。 [渡辺]
- (48) 彼の下で働いたことのある人々は**誰でも**(中略)と知っていた。 [藤原]
- (49) **誰でも**好きな人を相手に選んでもらってかまわない。 [沢木]

否定用法では、「何」同様に、付加マーカ―がついた形での語彙化は観察されなかった。しかし、全称量化用法同様、遊離構文型(例文 52)以外に、付加マーカ―のつかない裸の形(例文 50)で連体要素を受けたものも見られ、「何」系よりも様々な形で連体要素を受けられることが、「誰」系全体の特徴となっている。これは、「誰」という語そのものがもともと「何」という語よりも名詞的受け素性を備えていることを示しているのではないかと考えている。

- (50) 頼央以外の**誰**の意思でもないことは確かなようで。 [筒井]
- (51) そこまでは会員の**誰も**気付かなかった。 [渡辺]
- (52) あんた以外には**誰も**獣を眺める人間なんていないさ。 [村上]

#### 4.3 「どこ」系不定語

	存在量化		全称量化		否定	
	出現数	連体構造	出現数	連体構造	出現数	連体構造
+MK +格助	196	31				
+格助	7	1	47 (7)	1 (1)	53 (2)	3
-格助	18 (17)	(3)	13 (7)	(7)	6 (1)	

図3: 「何処」系不定語用法別出現数

最後に、「どこ」系の不定語それぞれの用法別出現数を図3に示した。存在量化用法では、先の「何か」「誰か」同様に「どこか」の語彙化が進んでいるが、ただ助詞「から」に関しては「どこからか」という形で使用されており、先の二つには見られなかった付加マーカ―無し助詞後接の用例が採集された(例文 54)。これは「どこか」の語彙化の進捗というよりは助詞「から」の特性から来る現象のように思われるが、確かなことはまだ分かっていない。

- (53) それが心の**どこか**に見えるような気もする。 [川端]
- (54) 店内の**どこからか**漂ってくる。 [筒井]

全称量化用法に関しては、「誰も」のような付加マーカ―がついた形での語彙化は見られなかった。しかし「誰」同様に裸で連体要素を受けた形が見られる(例文 55)。ま

た、「どこ」に関しては、同格構造と考えられるものでも、「どこ」が「主名詞」と同じ助詞を取っている場合があり、「何」「誰」よりも使用分布表が複雑になっている。特に、ここにあげた例文 56 は、同格と思われる主名詞と「どこ」が異なった助詞を後接しているおもしろい用例といえる。

(55) 世界のどこの動物園をさがしたって (後略) [井上]

(56) わたしの行くところへはどこにでもあらわれる。 [筒井]

否定用法に関しては、先の「何」「誰」同様に付加マーカがついた形での語彙化は見られなかった。「誰」同様に様々な形で連体要素を受けるが、「どこ」の場合はそのほとんどが例文 57, 58 に見られるように「名詞+の」の形のものであり、連体節などの複雑な内容の修飾要素は、例文 56, 59 のように、遊離構文型に限られている。

(57) 地上のどこにも存在しない。 [開高]

(58) 新聞は部屋のどこにも見つからなかった。 [開高]

(59) お前の気に入った家でさえありや何処でもいいんだ。 [谷崎]

## 5 まとめと今後の課題

先行研究などでも可能とされる不定語を直接修飾する形が一定の作者にしか使用されていないことから、この連体修飾構造が比較的新しい形ではないかと考えた。不定用法自体が比較的新しい用法であることはいくつかの文法史研究 (此島 1966, 尾上 1983, 衣畑・岩田 2010) で指摘されているとおりであり、その連体修飾構造が新しい構造だということは特に驚くべきことではない。しかしながら、不定語の内部構造も複雑であり、用法ごとに、また語ごとに現在使用される構造が異なっている。今回はそのような現状を、不定語の名詞性獲得過程の現象ととらえ、語彙化という面からコーパスを用いた用例分析を行い、「何」系、「誰」系、「どこ」系の3つの不定語に関し使用を観察することで語彙化の現状の把握を試みた。

語彙化の確認されたものは、特に存在量化用法の「何か」「誰か」「どこか」で、全称量化用法では「誰も」のみであった。これらは、付加マーカがついた形で助詞が後接し、連体要素も受けることが可能である。しかし、連体構造の主流はあくまで同格の主名詞が修飾要素を受ける遊離構文型であり、不定語の語彙化が進んでいない用法ではもちろん、不定語の語彙化が最も進行している存在量化用法でも不定語を直接修飾する形と並行して現在も多用されている。また、「誰」「どこ」はこれらの語自身の名詞的受け素性が高く不定マーカを付加して語彙化する以前に裸の形で連体修飾要素を受ける例が見られ、不定語の体系全体としては、かなり複雑な様相を呈していると言える。そのため、本研究にはまだまだ様々な課題が残されている。

今回考察の対象としなかった他の不定語に関しても分析が必要なことはもちろん、連体構造が正確にどのように現れてきたのかを知るための通時研究なども興味深いテーマである。また、今回は文学作品を分析の対象としたが、新聞記事等のコーパスを用いた場合でも同じ結果が得られるのか検証が必要である。さらに、語彙化が進んでいると言っても、不定語を直接修飾する形には様々な制限があると考えられるが、



具体的にその制限が何かということは分かっていない。日本語教育，自然言語処理等の他の分野への応用を考えるならば，これらの条件を明らかにして行くことも不可欠であると考えている。

最後に，本研究の発端となったフランス人言語学者ルゴフィックの WH 語-コネクタ説 (Le Goffic 2002) との関わりについて一言加えたい。このルゴフィックの仮説とは，WH 語（フランス語では Qu ワード）が疑問語，不定語の他に構文コネクタとしても機能することは普遍文法の一つであるとするものである。WH 語である基底語が関係詞として機能しない日本語はルゴフィックの仮説の否定材料なのであるだろうか。実はそうとも言いきれない側面もある。もともとこの仮説では，WH 語の進化の過程を，まず疑問・不定用法があり，そこから内在構造を構成するコネクタへと発展し，さらに文法化が進み，関係詞になるとしている。内在構造とは，先行詞がなく，WH 語自身が関節となり，二つの節を接続する構造 (ex. *You give me what I need*, cf. 複合関係詞) を指す。現在，不定語の連体修飾構造が不定語の語彙化に伴って発達していることを考えると，日本語は今まさに不定語が内在構造を形成するコネクタの機能を獲得する過程であるとも考えられ，内在構造コネクタを持たない日本語に関係詞がないのは当然であると言える。このように考えた場合，ルゴフィックの仮説は日本語に関係詞がない理由を提示しているとも言えるのである。

#### 使用コーパス

『DVD 版新潮文庫 100 冊』(1995) に収録された以下 11 作品：谷崎潤一郎 (1926) 『痴人の愛』，川端康成 (1935) 『雪国』，藤原正彦 (1953) 『若き数学者のアメリカ』，三島由紀夫 (1956) 『金閣寺』，開高 (1957) 『パニック/裸の王様』，吉行淳之介 (1963) 『砂の上の植物群』，渡辺淳一 (1970) 『花埋み』，井上ひさし (1970) 『ブンとフン』，筒井康隆 (1977) 『エディプスの恋人』，沢木耕太郎 (1981) 『一瞬の夏』，村上春樹 (1985) 『世界の終わりとハードボイルドワンダーランド』

#### 参考文献

- 江口正(1990)「日本語の間接疑問文の構文論的特徴—数量詞・不定代名詞との類似点について」『九州大学言語学研究室報告』11
- 奥津敬一郎(1985)「不定詞同格構造と不定詞移動」『都大論究』22
- 奥津敬一郎(1985)「続・不定詞の意味と文法」『人文学報』173
- 尾上圭介(1983)「不定語の語法と用法」渡辺実編『副用語の研究』明治書院
- 衣畑智秀，岩田美穂(2010)「名詞句位置の力の歴史—選言・不定用法を中心に」『日本語の研究』6-4
- 此島正年 (1966) 『国語助詞の研究—助詞史の素描』桜楓社
- 益岡隆志，田窪行則(1992) 『基礎日本語文法』くろしお出版
- 三原健一(1994) 『日本語の統語構造』松柏社
- Kamio (1973) Observations on Japanese Quantifiers, *Descriptive and Applied Linguistics*, 6, pp. 69-92.
- Le Goffic, P. (2002). Marqueurs d'interrogation / indéfinition / subordination : Essai de vue d'ensemble. *Verbum*, XXIV (4), pp. 315 - 340.